

いの流水俳壇

「当季雑詠」

一品は浜の潮風夏料理

松尾 満津於選

岡本とも子

〔評〕季語の感性を畳みこんだ、すがすがしい句である。夏料理にどんなものがあつたのか、想像するしかないが、その雰囲気と情景はよく理解できる。確かな省略で涼気がしつかりと捉えられており、作者の感性のよさを見せた句である。身構えて仲々作れる句ではない。

さよならの届かぬ距離となる日傘

刈谷 志津

〔評〕どこにも気張ったところがなく、情景のよくわかる句である。「さよなら」と手を振って遠ざかるのが誰なのか顔が見えないだけに、母娘、親戚、友人等、様々の顔が、句を観賞する中で、見えかくれする。微妙な日傘の存在。

裏返し返して梅の土用干し

井上 郁子

〔評〕塩漬けにした梅は四、五日で一旦筵に並べ日に曝す。紫蘇などを加えて再び漬けなおし、更に又干す。これを繰り返して、次第に吟味された梅干ができてくる。梅干は土用中が一番よいといわれており、先輩の指導に従って少しでも上等の梅干をと心掛けている姿が眼に見えるような句である。

店頭に叩かないでと西瓜かな

川村 博子

〔評〕西瓜はもともと秋季の作物として栽培されたものであつたが、近年は早生種が多く店頭に出回るようになった。如何に皮となる部分が薄く、味のよいものが出荷できるかが、西瓜作りの生命となっている。「叩かないで」の中七文字でこの句のすべてが云い尽くされており、客と店番それぞれの思惑の中に陳列棚の西瓜が浮き彫りになっている。
あんな買うの？買わないの？…。

三尺寝犬の肥満と言ふなかれ

植田 紀子

大岩を締め尽して葛咲けり

竹崎 光子

割箸を銜えて割って流しソーメン

間 浩太

古い門石碑の奥なる夏茗荷

川上こよね

ふる里の稲田のにおう風渡る

川村千図子

夕焼や猫がニャンと恵比寿顔 森岡 照月

秋立つ日昨日と違う空がある 秋田 律子

老いたれば母の事など麦こがし 津田 久美

ふと思ひ蟻引き返すこともある 楠目 哲郎

遠花火音に誘われべランダへ 中野 好子

石塀小路曲りて別の炎暑かな 伊藤 たみ

雷雨去り山ひだに靄わきいでぬ 筒井 文

今年こそ今年こそはと天の川 浜田美智子

読経の吐切れし余白蟬しぐれ 友草 水月

七変化藍に始まる夕景色 片岡 包女

噴水の虹の向うに明日を見る 大川 節弥

水量の増えて岸辺の合歡の花 川村 愛

電線に音符となりし秋つばめ 弘瀬うき子

なつかしき友との出会い夏まつり 岡林 幸子

出穂の準備完了青田かな 筒井 眉躬

皺の手で計る胡瓜の塩加減 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」

締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

お 礼

いの町3040-7

清水忠夫様から

多額のご寄付をいただきました。

仁淀病院

いの町幸町3680番地

小西雅子様から

故小野春茂様香典返しとして、多額のご寄付をいただきました。

仁淀清流苑

紙上をもちまして、厚くお礼申し上げます。

